

子供のために反撃せよ

中高校における生徒の暴力事件には、やや沈静化の気配が見られる。しかし小学校では平成九年以来最悪の事態を二年連続して更新した。

平成四年における小学生の暴力事件は、前年度より二百九十件増加して千八百九十件あったと伝えられる。中には、あいさつを指導した教師に殴りかかり、足をけったという五年生もいる。この五年生の「加害行為」に対して、教師はどのように対応したのであろうか。

不正に他人をけ飛ばしたら、反撃されるのが世の常である。この教師はそのように「適切に」対応したのであろうか。否、決してそうではあるまい。おそらく教師は、暴れる子供の体を押さえる程度に「自己抑制」し、後に「温かく」「しみじみと」「懇切に」「指導した」のに相違あるまい。

その結果子供は、教師とは殴ったりけ飛ばしたりしても決して反撃することのない極めて安全な生き物だと実感したに違いない。かくして全国に、生きたサンドバックのごとく子供に殴られっ放しの教師が輩出するに至ったのである。

相手が子供であろうと、暴力は暴力である。急迫不正の侵害に対しては、ためらうことなく反撃しなければならない。世の中とはどんな場所であるかを、骨身にこたえて分からせなければならないのである。

だが実際にそんなことをやったら、教育委員会が黙ってはいるまい。教育委員会の「ご意向」を過度に気にする校長も、直ちに子供に謝ってこいと教師に要求するに違いない。厳しく批判され、陳謝を強要され、さらには処分さえ覚悟しなければならないのだから、結局けられっ放しの方が安全だということになる。

このような小学生の暴力事件に関して文部科学省は「学校全体で問題児童の対応に当たるよう指導を徹底する」と答えている。では「学校全体で」どのように「対応」するのか、その答えはない。

中高生ならともかく、小学生にここまで学校が「なめられる」ようになったのはなぜなのか。この点の深刻な反省が文科省には欠落している。地方教育委員会は、文科省のこの姿勢を忠実に反映している違いない。高校に暴力事件が意外に少ないのは、高校には退学という制裁手段があるからである。

小学校でのしつけが不十分な上、退学、停学というような制裁措置も持たない中学校では、いったん暴力事件が発生したら、手の施しようがない。マスメディアにも知られるようになり、最後には保護者に学校を巡回してもらって何とか沈静化するというのが、これまでの一般的なコースなのである。学校の無能ぶりを天下にさらけ出すようなものではないか。

文科省、教育委員会は今も「体罰絶対禁止」を振り回す。だが法に言う「体罰」が何を指すのか、その概念規定され明確ではないのである。小学生までが荒れ狂う現状にあってわれ

われは、戦後の指導姿勢を、根本的に見つめ直さなければならないのである。

(平成 17 年 10 月 10 日 産経新聞掲載)